

中世草庵文学の系譜より見た『幻住庵記』

竹 島 智 子

はじめに

芭蕉の幻住庵生活は、元禄三年四月六日より、同年七月二十三日までである（元禄三年四月八日付 怒誰宛書簡ならびに、同年七月二十四日付 怒誰宛書簡による）。入庵後まもなく、芭蕉は、

比良・三上・湖上不^レ残、勢田の橋の下に見へて、田上山・笠とりに通ふ柴人わが山の禁をつたひ、岩間道・牛の尾・長明が方丈の跡も程ちかく、愚老不才の身には驕過（ぎ）たる地にて御坐候。（元禄三年四月十日付 如行宛書簡）

としるし、さらに、

発端行脚の事を云て、幻住庵のうとき由、難至極。陳（じ）而日、蝸牛蓑虫の栖を離（る）と云て、行衛なき方、流勞無住終に一庵を得る心なれば、前段行脚共に皆居所にか、り候。長明方丈の記を読（む）に、方丈の事はむとて、新都の騒動・火事・地震の乱、皆是栖の上をいはむとなり。（元禄三年七、八月頃筆 去來宛芭蕉書簡）

とも見え、『方丈記』（鎌倉初期一二二二年の成立）から多く学んで

ていることがわかる。

また、

五百年來昔、西行の撰集抄に多くの乞食をあげられ候。愚眼故能き人見付（け）ざる悲しさに二たび西上人をおもひかへしたる迄に御坐候。（元禄三年四月十日付 此筋・千川宛芭蕉書簡）

としるしており、『撰集抄』（『方丈記』より約半世紀後の成立と推定される）を、西行の著書と思つて読んでいたことが明らかである。

中世草庵文学については、石田吉貞著『中世草庵の文学』に詳説されており、その文学作品も広範囲に及ぶ。本小論では、芭蕉の『幻住庵記』に焦点をあて、中世草庵文学の中でも、特に強い影響を与えたと思われる『方丈記』（日本古典文学大系本による）と『撰集抄』（岩波文庫本による）に限定して述べたい。芭蕉がいかに中世草庵文学を摂取し、また、いかに自己の文学として創造させていったかを考察したい。

一、住居

(イ)草庵の位置

草庵の位置は、『方丈記』では、

その所のさまをいはず、南に懸樋あり。岩を立てて、水を溜めたり。

林の木ちかければ、爪木をひろふに乏しからず。名をと山といふ。ま

さきのかづら、跡埋めり。谷しげけれど西暗れたり。

とあって、水と樹木に恵まれた閑静な場所を思わせる。

『撰集抄』では、具体的に地名のしるされたものと、漠然としたものがある。前者には、「大和多武峯」(巻一―第一)、「讃岐の国多度の郡」(巻五―第一四)、「相模の国大庭と云野」(巻七―第三)がある。後者には、「山中」(巻一―第七、巻二―第六、巻三―第五、巻五―第二、巻七―第一五)、「山の奥」(巻二―第五、巻五―第五)、「山の谷合に木暗き事もいたくなかりける所」(巻二―第七)、「山のかふもと」(巻一―第三、巻五―第七)、「日影ももらぬ木の下」(巻一―第五)、「草かたぶくまでに見ゆる道」(巻六―第八)、「川のほとり」(巻一―第二、巻七―第七)のように、簡単にしるされたものと、

前は野辺、そつらん繁くなりて風にやぶれ、虫の声は草の根ごとにし
どろ也。後は山、嵐よりく訪れて松葉琴を調ぶ。右は海漫々として
際もなし。左は清洲河岸高ふして岩つつ波くだけつ、ほのかに聞え
侍り(巻四―第四)

前は野辺、うしろは山路にて清き瀧おちて(巻五―第九)

山陰の清水きよく流れて、まへは野のはるくとある(巻六―第四)

のように、具体的に景観のしるされたものがある。また、「八中にし侍れども」(巻五―第九)は、逆接助詞「ども」が示すように、人里に庵があるのは、例外的であったと考えられる。かくて、草庵は、人里はなれた所、多くは山中で、さまなければ、山に近い野や川辺に建てられたようだ。もつとも、山中とは言え、山の奥ふかくもつた人は少なく、大多数は、山の中腹にいて、清水の音を聞きながら、心を澄ませたようである(『撰集抄』には、「心を澄ませる」という表現が多い)。そのことは、いかに世拾人と云えども、生活する以上、なお人里には愛着を抱かざるを得ないものであったと思う。

『幻住庵記』には、「山は未申にそばだち、人家よきほどに隔り」とあって、ここでも、山がそびえ、人家も適度に隔った中腹であったことがわかる。「日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて」「螢飛かふ夕闇の空に、水鶏の叩音、美景物としてたらずと云事なし」(『幻住庵記』)などと美しい描写であるが、虚構を考慮に入れば、実景は、わりびいて考えなければいけないであろう。しかし、此度住ム處ハ石山の後長良山之前、国分山と言(ふ) 處幻住庵と申破茅、あまり静(か)二風景面白(く)候故、是にだまされ卯月初(め)入庵、暫(し)残生を養(ひ)候。(元禄三年四月十日付知行宛芭蕉書簡)

とあるように、中世の草庵に似た静かな美景を楽しみ、「やがて出じとさへおもひそむ」(『幻住庵記』)ほど気に入ったことも、相違あるまい。さらに、「たま／＼心まめなる時は、谷の清水を汲て自ら炊

ぐ。〔幻住庵記〕とし、「身骨弱二而つま木拾ひ清水汲（む）事ハいたみて口惜（しく）存候。」（元禄三年四月十日付 知行宛芭蕉書簡）ともあるように、清水のあるよい環境であつたらしく、現在でも、幻住庵跡の裏手に、小さい水だまりが見える。

笠とりにかよふ木樵の声、（中略）昼は稀々とぶらぶら人々に心を動かし、あるは宮守の翁、里のをこ共入来りて、ゐのし、の稀くひあらし、兔の豆畑にかよふなど、我聞しらぬ農談、（下略）〔幻住庵記〕

は、またふもとに一の柴の菴あり。すなはち、この山守が居る所なり。かしこに小童あり。とき／＼来たりてあひとぶらふ。若、つれ／＼なる時はこれを友として遊行す。（中略）歩みわづらひなく、心遠くいたるときは、これより峰つゞき、炭山をこえ、笠取を過ぎて、或は石間にまうで、或は石山ををがむ。〔方丈記〕

を、ふまえたのであろう。かくて、幻住庵の位置は、『方丈記』や『撰集抄』に見える草庵と本質的にはかわらないが、「城有、橋有、釣たる、舟有。」（『幻住庵記』）は、人工美で、近世文学らしいヒューマニズムを思わせる。

（四）草庵の規模

『方丈記』に見える草庵は、

三十あまりにして、更にわが心と、一の庵をむすぶ。これをありしすまひにならぶるに、十分が一なり。居室ばかりをかまへて、はか／＼しく屋をつくるに及ばず。わづかに築地を築けりといへども、門を建

つるたづきなし。竹を柱として車をやどせり。

とあり、さらに、「六十の露消えがた」になると、

広さはわづかに方丈、高さは七尺がうちなり。所を思ひ定めざるがゆゑに、地を占めてつぐらず。土居を組み、うちおほひを葺きて、継目ごとにかげがねを掛けたり。

といった、質素なものであつた。

『撰集抄』に見える草庵は、「かたばかり」「かたのごとく」「わづかなる」ということが示すように、簡素なものであつた（巻一、二、五、七）。庵の建材は、「み山の草」（巻三―第七）や「木の枝、木の葉」（巻二―第七）では漠然としているが、「ならの葉」（巻一―第七）、「すき、かるかや、をみなへし」（巻六―第八）、「しば」（巻七―第一五）となると、具体的にわかる。かくて、文字どおりの草庵であつたらしい。草庵の広さも、「口三間なる屋」（巻二―第六）では、奥行が不明だが、「方丈の庵」（巻九―第七）となると、はつきりする。いずれも、簡素な独居であつた。

『幻住庵記』では、

日比は人の詣ざりければ、いとゞ神さび物しづかなる傍に、住捨し草の戸有。よもぎ・根笹軒をかこみ、屋ねもり壁落て（中略）とく／＼の雪を侘て一炬の備へいとかるし。はた昔住けん人の、殊に心高く住なし侍りて、たくみ置る物ずきもなし。持佛一間を隔て、夜の物をさむ處などいさ、かしつらへり。

とある。定稿以外の前稿も、すべて「草の戸」となり、持仏のある一間と小さい物置からなつた方丈ぐらいのあばらやであつたと推測

しく屋をつくるに及ばず。わづかに築地を築けりといへども、門を建

一間と小さい物置からなつた方丈ぐらゐのあばらやであつたと推測

する。

(ハ)草庵付近の動物

人里より離れた草庵であるから、付近には、動物も多くいたらしい。「方丈記」には、猿・蝻・山鳥・梟が見える。「撰集抄」には、「よぶ子鳥・うづら」(巻一第七)、「虫の声は草の根ごとにしどろ也」(巻四第四)、「虫の音物あはれに衷猿の声まことに心すし」(巻五第六)、「蘭荊には野干ふしどをしめ、松葉には鳥なける所に虫の友として、鹿をしたしみ契り侍り」(巻六第四)とあるように、虫・鳥・猿・キツネ・鹿等の鳴き声を身近に聞いて生活していたものと思われる。

芭蕉は、「野生、御立後大津にしばし遊び候而、庵の狸の穴などふさがせ、三日四日在庵、」(元禄三年六月三十日付 曲水宛書簡)とし、「幻住庵記」にも、

よもぎ・根笹軒をかこみ、屋ねもり壁落て狐狸ふしどを得たり。(定稿 元禄三年八月に成る)

と見える。この部分を、定稿に近い前稿と見られる米沢家蔵真蹟では、

かの住捨し草の戸は、勇士菅沼氏の曲水子の伯父なりける人の、世をいとひし跡とかや。

となつて、狐狸云々が見えない。さらに、それ以前の稿と見られる「芭蕉文考」(元禄三年七月下旬に成る)では、

其傍に住捨し草の戸のやねくさり壁落て、松・躑躅軒を囲み、す、き

根笹庭を閉て、狐狸の足跡のみほのかなり。

とある。最初期の染筆と見られる阿刀弘文蔵「言語と文芸」六二号所収)では、

爰元住あらしたる草の戸あり。

と見える。

思うに、芭蕉は、「住あらしたる」様子を、文学作品とすべく考察して、「狐狸の足跡のみほのかなり」という、具体的にしてひそやかな表現をとつた。しかし、これでは柔弱で、荒廃感が出ないと思つたのか、次稿では、削除している。定稿では、「狐狸ふしどを得たり」と明確にして、あばらやの荒廃感を強調し、俳諧精神をのぞかせている。

ところで、「狐狸ふしどを得たり」という表現が、『撰集抄』の「野干ふしどをしめ」によつたものであるとは、断言できないが、西行自著と信じていた『撰集抄』のこの一句にヒントを得て、定稿としたのではなからうか。西行を強く慕い、西行から多く学んだ芭蕉であるから、考案の末、西行の作品を想起することは、いかにもありそうなことと思われる。また、『幻住庵記』(定稿)の「狐狸云々」に流れている荒涼とした情趣は、中世草庵文学の系譜によるものであろう。

二、衣服

『方丈記』から、草庵生活者の衣服を見ると、「藤の衣、麻のふすま、得るにしたがひて、肌をかくし」とあるように、粗末であつ

た。彼らは、「人にまじはらざれば、すがたを恥づる悔いもなし。」
と思つていたのである。

『撰集抄』では、「こも」(巻一―第三・第六、巻三―第四)、「か
たびら衣」(巻三―第一・第九、巻五―第八、巻七―第一〇)、「麻
の衣」(巻三―第五、巻五―第二・第七、巻九―第一)、「小袖衣」
(巻一―第一、巻三―第七、巻五―第八)、「黒き衣」(巻二―第七、
「あはせ」(巻二―第八)といった質素な衣服であった。さらに、
「むしろ」(巻三―第二)をつけていた乞食に対し、草庵生活者は、
自らの衣をぬいで与えるという喜捨の仏教観もうかがえて、中世の
作品らしい特色が見える(巻二―第八)。

芭蕉も、質素な衣服であつたらしい。

笠は長途の雨にはころび、希子はとまりくくのあらしにもめたり。侘
びつくしたるわび人、我さへあはれにおほえける(『冬の日』こがらし
の巻・巻頭句前書) 旅の具多きは道ざはりなりと、物皆拂捨たれども、
夜の料にと、かみこ壺つ、合羽やうの物(『笈の小文』)

希子一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具(『奥の細道』)
としるしている。幻住庵にいた時も、おそらくそのような衣服であ
つたと思う。『笈の小文』に見えるように、最小限必要な笠・紙子
・合羽・ゆかたにとどめていた。江戸時代にはいつて、紙子が一般
に用いられている点、時代の相違を思わせるが、芭蕉は、僧形に近
い姿でわたり歩いた「わび人」であつた。ここに、中世的求道者と
しての姿がうかがえる。もっとも、『方丈記』や『撰集抄』に見え
る草庵生活者は、芭蕉のような旅人としての性格を持たないため、

雨具などは記載されていない。しかし、『方丈記』や『撰集抄』に
濃厚に流れている無常観が、芭蕉にも深く注いでいることは周知の
とおりである。旅人芭蕉の一所不住の精神は、中世草庵文学に源を
発し、さらに、自らの文学として一歩すすめたものと考えられる。

また、芭蕉は、

有人の会

ためつけて雪見にまかるかみこ哉(『笈の小文』)

とあるように、雪見の会に招待されても、古い紙子の折目を正して
出席するという質素なものであつた。そのような身にとつて、

門人杉風子、夏の料とてかたびらを調じ送りけるに

いでや我よきぬのきたりせみころも(貞享四年作)

と、杉風からかたびらをもらつた心のはずみもひとしおであつた。

みかはの国鳳来寺に詣る道の辺より例のやまひ起りて、ふもとの
宿に一夜あかすとて

夜着ひとついのり出して旅ね哉(元禄四年作)

には、持病に苦しめられた冬の宿で、暖い夜着を借りられた謝念が
うかがえる。質素な生活であつただけに、人の温情は、身に沁みた
のであろう。

携帯品は、『方丈記』では、法華経・和歌・管弦・往生要集・を
り琴・つき琵琶がしるされている。

『撰集抄』では、「本尊持経」(巻二―第一、巻五―第七)と「硯
筆」(巻六―第八)が明記されていて、一冊の経本と筆記用具ぐら
いの簡素なものであつた。

芭蕉の落柿舎滞在中、去來が読みものとして、白氏集・本朝一人一首・世継物語・土佐日記・松葉集を座右に置き、硯や文庫もそなえた（『嵯峨日記』）。しかし、芭蕉が、これらを取り出して読むということは、あまりしなかつたものらしいことは、重友毅氏が述べられている（『芭蕉の研究』所収「嵯峨日記について」）。

三、食物

次に、食物は、どうして得たのであろうか。

『方丈記』では、

野辺のおほき、峰の木の実、わづかに命をつぐばかりなり。（中略）糧ともしければ、おろそかなる報をあます。

とあり、清貧に甘んじた生活態度がうかがえる。

『撰集抄』では、時々人里に出かけて食物を得ていた（巻一―第一・第三・第五、巻二―第五、巻三―第二・第六、巻七―第三）。草庵が、山ふかくないことが多いのは、食物を得る便宜にもよつていたと思われる。なかには、「里へ出るわざなんどもせざりければ、人々あはれみて、食物かたのごとくしてぞ世をわたりける」（巻二―第三）、「明暮の食事、人のあはれみて、とかくしてぞ過ける」（巻五―第二）のように、里人が食物を持参する場合もあつた。いずれにせよ、草庵生活者は、里人の世話になつていたようである。

芭蕉も、

甲斐の山中に立よりて

行駒の麦に慰むやどり哉（貞享二年作）

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜なすび（元禄二年作）

野明亭

清瀧の水汲よせてとてころてん（元禄二年作）

五月の雨かぜしきりにおちて、大井がは水出待りければ、しまだにとどめられて、如舟・如竹などいふ人のもとにありて

ちさはまだ青ばながらになすび汁（元禄七年作）

あさくさ千里がもにて

苔汁の手きは見せけり浅黄桶（年次不詳）

など、門人や知人の家を訪れ、手厚いもてなしを受けていたようである。また、

調業の物共、京より持来りて乏しからず。（『嵯峨日記』）

石河北鯨生、おとうと山店子、我つれぐ／＼なぐさめんとして、芹の飯煮させてふりはへて来る。金泥坊底の芹にやあらむと、其他の

侘も今さらに覚ゆ

我ためか鶴はみのこす芹の飯（年次不詳）

のように、芭蕉のもとへ持参してくれたり、

ともにこもれる人ひとり、心ざしひとしくして、水雲の狂僧なり。薪をひろひ、水をくみて（阿刀弘文蔵「幻住庵記」）

や、

曾良は河合氏にして、惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、

子が薪水の勞をたすく。（『奥の細道』）

等、芭蕉を助けてくれる共同生活者もいたらしい。

さらに、『方丈記』は、前記のごとく、菜食生活であり、『撰集抄』でも、「食物は魚鳥をも嫌はず」（巻五―第五）と見え、大部分の隠者は、仏教思想も影響して、菜食中心の生活であつたことがわかる。

芭蕉も、

南都の別一むかしのこ、ちして、一夜の無常一庵のなみだもわすれがたう覚、猶觀念やまず、水上の淡きえん日までのいのちも心せはしく、去年たびより魚類肴味口に拂捨、一鉢境界乞食の身こそたうとけれど、うたひに侘し貴僧の跡もなつかしく、猶ことしのたびはやつしくてこもかぶるべき心がけにて御坐候』（元禄二年正月乃至二月初旬筆 猿

雖〈推定〉宛書簡）

としるし、『笈の小文』の旅を終えた元禄元年（貞享五年）頃より、魚肉を断つたらしい。貞享五年夏には、

おもしろうてやがてかなしき鵜舟かな

とあり、その頃からであろう。元禄六年の芭蕉の句にも、

蒟弱にけふは売かつ若菜哉

雉水に琵琶きく軒の霞哉

とあつて、魚肉がしるされていぬ。芭蕉への追悼句に、

たむけばや霜の小菊のひたしもの 梢風

と見える。これらよりして、芭蕉は、植物性の淡泊な食物を好んだらしい。それには、芭蕉の嗜好と共に、胃腸の弱い健康状態をも反映していると思う。

おわりに

芭蕉は、衣食住にわたつて、『方丈記』や『撰集抄』のしるす草庵生活者と、本質的に変わらない実生活であつた。いわば、中世の草庵生活を追体験して、彼らの精神を体得しつつ、自らの俳諧文学に生かそうと思つたのであろう。さらに、芭蕉独自の近世文学らしいヒューマニズムや俳諧精神が見られてよい。